

KiSS-18研究ノート

菊池 章 夫

Notes on the Researches Using KiSS-18

Akio KIKUCHI

Over 60 articles and presentations using KiSS-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items) were critically reviewed. KiSS-18 has been widely used in different research areas; social, clinical, industrial, and educational psychology as well as nurse-education. Those researches suggest that this scale is highly reliable and valid, and also would be useful to other research topics.

■KiSS-18のこと

KiSS-18(Kikuchi's Scale of Social Skills: 18items) は、菊池 (1988a・b) によって開発された社会的スキルを測定する尺度である。社会的スキルがどのようなものであるかについては多くの議論がある (菊池・堀毛, 1993) が、ここではそれを対人関係を円滑にするスキルであるとしておきたい。もっといえば、相手から肯定的な反応をもらい (「おはよう」といったら「おはよう」と答えてもらえ) ・否定的な反応をもらわない (「バカ」といわれたり無視されたりしない) ように作用するのがこのスキルであるといえる。

この尺度を構成する項目のもとになったのは、臨床心理学者Goldsteinら (1980) の「若者のための社会的スキル」のリストである。このリストでは50項目の社会的スキルが、1) 初歩的なスキル 2) より高度のスキル 3) 感情処理のスキル 4) 攻撃に代わるスキル 5) ストレスを処理するスキル 6) 計画のスキルの6領域に分けられている。この50項目について、例えば初歩的スキルの「会話を始める」は「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」、計画のスキルの「目標設定」には「仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか」といった質問

を用意して、中学・高校の男性教師グループと男・女の大学生の3グループに5件法で回答してもらった。このデータを用いて、グループ別に全体得点とそれぞれの項目との相関係数を計算し、それが3つのグループで0.4以上の項目を使うことにした。そして最終的には、6つの領域からそれぞれ3項目を選び、合計18項目からこの尺度 (KiSS-18) を構成した。Table 1 に載せたのがこの項目である。この場合、基本的には総合得点のみを問題にし、領域別の得点はとり上げない。作成の経過から、この尺度の適用の範囲は中学生以上の「若者」であるが、以下にみるように、成人にはもちろん高齢者に適用した例もある。

この尺度の公表 (菊池, 1988b) 以降、それを用いた多くの論文が他の研究者によって公刊され、学会発表もかなりの数に上る。それらをまとめた報告はすでにある (菊池, 1998・1999) が、尺度の公表後15年になることもあって、改めてまとめようとしたのがこのノートである。なお、以下に紹介する相関係数などのデータは、 $p < .05$ 以下の有意水準のものである。

■信頼性

菊池 (1988a) は、男子大学生60名について.83、女子大学生67名について.86の α 係数を報告している。

Table 1 KiSS-18の項目 (菊池, 1988b)

1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
3. 他人を助けることを、上手にやれますか。
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
9. 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか。
12. 仕事上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
16. 何か失敗したとき、すぐに謝まることができますか。
17. まわりの人たちが自分と違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。

(注) 回答は「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5件法。配点は5から1までで、得点は18-90に分布可能。

中村 (2000) は、大学生・大学院生100名について.85の α 係数を、加賀谷・布佐・三浦・千田・村田 (2002) は、44名の新人看護婦について.79の α 係数を、稲垣ほか (2000) は、男女1890名の中高年齢者について.929の α 係数を算出している。和田 (2000) は男子大学生138人について.87、女子大学生143名について.81の α 係数を報告している。同じ和田 (2002) は、143名の男女の大学生の性行動を分析するために2回の調査をしているが、この尺度の α 係数は1回目について.88・2回目について.86であった。また和田 (2003) では、42名の大学生・大学院生についての α 係数は.86であるという。五十嵐 (2002) の男女の大学生265名についての報告では、.88の α 係数が認められる。

87名の看護学部学生 (1年生) について再テスト信頼性を検討した布佐ほか (未発表) は、.73 (4か月間隔)・.59 (8か月間隔) を示している。和田 (2002) は、大学生の性行動についての同じ調査を2回 (3-8か月間隔) 行い、キス経験と性交経験別に「未経験-未経験」「未経験-経験」「経験-経験」の3群を構成して、この尺度の2回の得点間の相関を求め、.75か

ら.89までの相関係数を得ている。

こうしたことから、この尺度は内部一貫性と安定性の点で、信頼性のある尺度といえる。

■因子構造の検討

男子大学生100名の資料を因子分析した菊池 (1993) は、「問題解決力」「トラブルの処理」「コミュニケーション能力」の3因子を抽出している。WWW掲示板への参加者を対象とした篠原・三浦 (1999) では、「一般的マネージメントスキル」「コミュニケーションスキル」「対人ストレススキル」の3因子構造であるという。松島 (1999) が男女の大学生・専門学校生443名のデータを因子分析した結果では、「対人積極スキル」「他者理解スキル」「対処行動スキル」「和解スキル」の4因子が見出されている。鈴木・坂元ほか (2001) は、男女の専門学校生217名のデータを因子分析して、「会話スキル」「問題解決スキル」「仕事 (勉強) スキル」の3因子を抽出している。廣實 (2003) は、437名の男女の大学生の資料を因子分析して、「関係開始」「関係修復」「自己解決」スキルの3因子を得ている。

千葉・相川（2000）は、260名の5年以上の臨床経験を持つ看護師と208名の看護短大生のデータを因子分析して、「言語的相互作用スキル」「感情処理スキル」「計画スキル」「対人的配慮スキル」「協調性スキル」の5因子を見出している。津村（2002・2003）は、2つの集団トレーニング・プログラムの参加者104名のデータを因子分析して、5因子を抽出している。「積極的コミュニケーション」「他者の困難援助」「計画的仕事」「ストレス処理」「感情処理」の5つがそれである。

これらの因子分析の結果は、調査の対象によっていくらか違ったものになっているが、相互に重複する部分も多く、いずれもこの尺度の内容を理解するのに役立つものである。

■他の尺度との関係

1) 堀毛（1985）の社会的スキル尺度（人当たりの好きさ尺度）との間には、女子短大生112名について.45の相関がある（菊池, 1988a・b・1998）。和田（1991）の開発した社会的スキル尺度とでは、その下位尺度である「維持」「開始」「回避」「拒否」について、320名の大学生の資料で、それぞれ.54・.48・.40・.11の有意の相関が示されている。

千葉・相川（2000）は、看護における社会的スキル尺度（SSSN）を開発しているが、この尺度は「患者尊重」「情報の収集と提示」「表出行動」「身体接触」「積極的接近」「空間距離」スキルの5つの下位尺度から構成されている。看護師260名と看護短大生208名についての分析の結果では、SSSNの合計得点と「空間距離」スキル以外の5つのスキルで、.30以上で $p < .01$ 以下の有意の相関関係が得られている。また、上で見たこの尺度の因子別に検討したところでは、「計画スキル」と「対人配慮スキル」でこれと同じ基準で有意の関係が認められた。布佐・三浦・千田・加賀谷・村田（2002）は、このSSSN（55項目）を56名の新人看護婦のサンプルを用いて新たに因子分析している。こうして構成された24項目のSSSN短縮版とスキル尺度との同じサンプルについての相関は.56であった。

飯田・石隈（2000・2002）は、自分たちの開発した中学生用のライフ・スキル尺度との関係を検討している。男女の中学生809名では、5つの下位尺度の中で「集団活動スキル」と.561・「同輩とのコミュニケーションスキル」で.658の相関が得られている。

2) 学校生活満足度尺度（高校生版）が川村

（1999）と粕谷・川村（1999）によって作成されている。この尺度とスキル得点との関係は、重回帰分析の結果から、下位尺度である「承認得点」と.398、「被侵害・不適応得点」と-.252の β 係数に示されている。橋本（2000）は男女の大学生200名について、全般的な健康度の指標であるGHQ28との間に-.19の相関を得ている。これは、自作の対人ストレスイベント尺度とGHQ28との相関値よりは低いという。和田（2003）では、大学生・大学院生42名について、スキル尺度を用いた自己評定で充足感尺度（大野, 1984）との間に.41、5人の同性の友人によるスキル尺度の他者評定との間では、充足感尺度と.41、疾病徴候項目（和田, 1992）と-.38・抑うつ尺度（福田・小林, 1973）と-.44の相関が認められた。この2つの評定でスキル得点が高い者は、心理的適応が優れているという結果であった。

3) 中村・益谷（1991）は感情コミュニケーション能力との関係を分析している。対象は64名の女子短大生で、使われたのは感情情報の読解能力と符号化能力尺度（Zuckermanら, 1979）・社会的スキル尺度（SSI）の一部（Riggio, 1986）・表出スタイル尺度（Izard, 1987）・感情コミュニケーション尺度（Friedmanら, 1980）などである。得られた相関関係はこの順に、.44・.38・.40・.33・.33であった。和田（1992）は大学生320名について、自分の開発したノンバーバル尺度との関係を報告している。下位尺度である「感受性」「表出性」との間に.37・.36の相関があったという。同じ和田（2003）は、42名の大学生・大学院生の自己評定と他者評定（5人の同性の友人による）について、スキル尺度とこのノンバーバル尺度との関係を報告している。自己評定では「感受性」と.62、他者評定では「表出性」と.34、「感受性」と.66という結果であった。この場合にも、感受性と表出性との関係が明らかであった。

4) 社会的スキルは対人的コンピテンスの一部として考えられるが、この点を検討したのがTakai & Ota（1993）である。この研究では、日本人の対人的コンピテンスを測定する尺度（JICS）を新たに作成し、男女大学生302名と一般人707名のデータを分析している。この尺度の全体得点と.49、下位尺度である「知覚能力」「自己抑制」「上下関係処理」「対人的感受性」「あいまいさ耐性」とはそれぞれ.49・.30・.31・.41・.12の関係が認められた。このJICSとの相関関係は、アメ

リカで開発された尺度の日本語版（例えばセルフモニタリング尺度）と日本で開発された尺度（堀毛, 1987）との中間にあるのは、興味深いことである。

非公式的なリーダーシップを測定するしきり行動尺度が作成されている（林・菊池, 1993・1994, 林・菊池ほか, 1994）。この尺度は4つの下位尺度から構成されているが、大学生95名の資料について「まあまあの型」で.39・「おれだよ型」で.24の相関があるとしている。

5) 松島 (1999) の報告では、443名の大学生・専門学校生のデータについて、自己開示質問紙（榎本, 1997）との間には.325の相関があり、特性シャイネス尺度（相川, 1991）とは-.714の相関がある。また、上で見た因子分析から出てきた4因子について自己開示との関係を重回帰分析で検討した結果では、「対人積極スキル」(.354)・「他者理解スキル」(.164)・「和解スキル」(.109)が自己開示行動と結びついていた。菊池 (1999) の報告では、女子大学生115名についての自己開示状況尺度（遠藤, 1989）と.26、男女の大学生165名についてのオープンナー尺度（小口, 1989）と.31の相関である。森脇・坂本・丹野 (2002) は、男女の大学生61名について、自作の「適切な自己開示」「不適切な自己開示」尺度との間に、それぞれ.45・-.29の値を得ている。また、前者の尺度を因子分析して得られた「文脈等配慮」「聞き手選択」「時間および場所選択」の因子とは.34から.48の相関が、後者の同種の因子である「聞き手等無選択」「無配慮」「ネガティビティ」とは、-.24から-.37の相関関係がみられている。

菅原 (1998) は自分の開発した対人不安傾向と対人消極傾向の尺度との間に、大学生135名のデータから、前者について-.43・後者には-.49を報告している。渡辺 (1999) は、自作の対人欲求尺度との関係を報告している。男女の大学生306名の資料では、この尺度の下位尺度である「賞賛（他者から賞賛されたい）」「回避（他者との関係を回避する）」尺度とそれぞれ.16・-.42の相関が得られたという。中村 (2000) が、100人の大学生・大学院生について得たUCLA孤独感尺度（工藤・西川, 1983）との相関は-.39である。

布佐・三浦・野崎・千田 (1999) と野崎・布佐・三浦・千田 (2002) は87名の看護学部学生について、自己効力感尺度（坂野・東條, 1986）との関係を分析し、1年間にわたる3回の調査のデータから、.605・.535・

.603の相関を報告している。また重回帰分析の結果では、自己効力感尺度の下位尺度である「行動の積極性」と「能力の社会的位置づけ」との間に有意の β 係数 (.517・.197) が認められた。加賀谷・布佐・三浦・千田・村田 (2002) では、新人看護婦44名について、自己効力感尺度との間に.49の相関があるとしている。大坊 (1991) は女子短大生341名について、自尊心尺度（遠藤, 1981）と.27、公的自意識尺度（菅原, 1984）と-.26、対人的不安尺度（押見ほか, 1985）と-.59、自己管理質問紙（大坊, 1991）と.39を報告している。

佐藤 (1996) は、日韓の大学生の自己表現性を測定する尺度（SASASS-13）を作成し、その日本語版・韓国語版とKiSS-18の原版・韓国語版との相関が、それぞれ.57と.65であったとしている。

中村 (2000) は自己愛傾向が友人関係の広さと関係するとして、自己愛人格目録（大石, 1987）との関連を分析している。大学生・大学院生100名のデータでは、この目録の総得点と.62、その下位尺度である「注目・賞賛願望」とは-.23、「統率・指導性」とは.34、「自立・主張性」では.41、「優越・有能感」とは.36の相関が認められたとしている。

6) 共感性については、菊池 (1988a・b・1998) が情動的共感性尺度（加藤・高木, 1980）との関係を分析し、大学生121名のデータでは、3つの下位尺度（温かさ・冷淡さ・被影響性）のいずれについても、有意の関係は見られなかったとしている。河野 (1996) は、同じ情動的共感性尺度について、102名の男女の大学生で、被影響性で-.27の相関を得ている。また、子どもへの親和的な態度を測定するMTAI短縮版（菊池, 1963）とは.29の相関があるとしている。多次元的に共感を測定する対人的反応性指標（IRI; Davis, 1983）の日本語版（菊池, 1999）との関係では、性差があることが報告されている。菊池 (1999) によれば、男子大学生62名の場合には視点取得尺度・個人的苦痛尺度と.26・-.26の関係がみられ、女子大学生106名では想像性尺度・共感的配慮尺度と.29・.27の相関があった。谷田・山岸 (2004) の研究では、IRIと加藤・高木 (1980) の情動的共感尺度との項目を因子分析して新たな共感性尺度が構成されている。大学生348名のデータからは、この共感尺度の下位尺度である他者志向的情動反応尺度とは.19、自己志向的情動反応尺度とは-.57、視点取得尺度とは.37の相関がみられた。

7) より全体的な性格要因については、矢田部・ギルフォード性格検査との関係が問題にされている(菊池, 1988a・b・1998)。男女の大学生111名の資料では、抑うつ傾向(−.35)・回帰傾向(−.20)・劣等感(−.26)・神経質傾向(−.23)とマイナスの関係が、一般的活動性(.43)・社会的外向(.56)ではプラスの関係がみられる。

8) 山近・大坊(2001)では、孤独感・否定的自己観・無気力感・将来の展望の欠如などの下位尺度からなるむなしさ感尺度を作成している。この尺度の下位尺度別の大学生144名についての重回帰分析の結果では、孤独感では男性がストレス処理スキル・女性が感情処理スキル、否定的自己観では男性が感情処理スキル・女性がストレス処理スキル、無力感では男性が計画スキルで得点が低いことが明らかにされている。

菊池(聡)(1999)は、自分の作成したおたく態度尺度とKiSS-18との関係を分析し、この尺度の下位尺度である「趣味(趣味にこだわりがあるなど)」と−.18、「内向(他人と話すことは苦手であるなど)」と−.59、「自己流(身だしなみに気を使わないほうであるなど)」とは−.32、「孤独(ゲームが好きであるなど)」とは−.33の、いずれもマイナスの相関があるとしている。

9) ソーシャル・サポート尺度(Zimetほか)との関係が、男女1890名の中高齢者について報告されている(稲垣ほか, 2000)。スキル得点の高い者はサポート得点が高く、多くのサポートを得る可能性のあることを示していた。この傾向は、対象を年齢別に3群に分けた結果でも同じであった。スキル得点の低い者は、年齢が高くなるとサポート得点が低くなるという結果も示されている。友人からのサポートを示す友人数は、年齢が高くなると少なくなるが、スキル得点の高い者は高齢になっても多くの友人を持っていた。

住田・田中・小杉(2003)では、スキル得点とソーシャル・サポート尺度(小杉, 2000: 一部修正)やコーピング尺度(和田, 1992)との関係が分析されている。男女の大学生362名から得られた結果では、友人(情緒的・道具的)と両親(情緒的・道具的・気楽さ・評価)のサポートについて、いずれの場合もスキル得点の高い群のサポート得点が高かった。また、このスキル得点の高いものは「積極的な問題解決」のコーピングを用いること、それが低い者はより「諦め」コーピングを使いやすいことが示されている。

橋本(2000)は、自作の大学生のストレスイベント尺度とスキル得点との関係に検討を加えているが、4つの下位尺度のなかで「深化回避」の下位尺度で−.48の相関がみられた。また、内省尺度と友人尺度(岡田, 1993)で測定した対人方略をクラスター分析して得られた4つのタイプとの関係では、表層群と内向群でスキル得点が低く、積極群ではそれが高かった。いずれにしても、「深化回避」にみられるような対人関係を避けようとする傾向はスキル得点の低さと結びついている。

田中・小杉(2003)は職場ストレススケール(小杉, 2000)との関係を、工業系企業従業員2275名のデータについて検討している。スキル得点と慢性型職場ストレス(過度の負担・役割不明瞭・過度の圧迫・能力欠如)とをクロスさせて、そのストレス反応得点を分散分析に掛けて比較したところ、ストレスの種類にかかわらず、スキル得点が低い群でストレス反応が強い結果であった。また、このスキルのストレス反応低減効果を検討するのに正準相関分析を行った結果からは、仕事の質的負荷(役割不明瞭・能力欠如)が高くスキル得点が低い場合には、「抑うつ」や「対人場面での緊張」などのストレスが高まること、仕事の量的負荷(過度の負担・過度の圧迫)が低くスキル得点も低いときには、ストレス反応全般は低くなるが、「対人場面での緊張」は高くなることが分かっている。

全体としてみるとこの尺度は、感情コミュニケーション・対人的コンピテンス・自己開示・自己効力感・ソーシャルサポート・コーピングなど積極的な体験とプラスの結びつきがある。これに対して、シャイネス・対人不安・孤独感・むなしさ感・おたく傾向・ストレスなどの否定的体験の測度とはマイナスの関係にある。これらの資料は、この尺度の妥当性を示したものといえる。

■行動的指標との関係

1) この尺度の得点が年齢とともに上昇することが、菊池(1998)によって指摘されている。この結果は、高校生・短大生・大学生・一般成人の資料を比較したものだが、いずれもサンプル数が少なく・その代表性にも問題がある。稲垣ほか(2000)は、男女1890名の中高齢者(58–83歳)のデータを収集している。得られた平均値は、全体的にいて菊池(1988b・1998)

の青年期のものより高かった。年齢との関係は男性ではみられなかったが、女性では75歳以上で得点が低くなっている。望月（1995）の報告では、慢性化した長期入院の分裂病（統合失調症）患者17名のこの尺度の平均値が、大学生や成人にくらべて高いという。こうした「高すぎる自己評価」は病棟の看護者によってなされた自己効力感の評定とは逆のものである。

野崎・千田・布佐・三浦（1999）は、87名の看護学部学生の平均値が、同じ大学の社会福祉・総合政策・ソフト情報学部の学生よりも高いことを報告している。この看護学部学生について、年間3回行った調査の平均値間には差が認められなかった。これと同様の傾向は、加賀谷・布佐・三浦・千田・村田（2002）によって、新人看護婦44名についての年間2回の調査でも見られる。もともとこの種のスキルが身についた学生や新人看護婦が多いことが理由であろうとされている。看護学部学生の場合には、6つの領域別に検討した結果では、感情処理のスキルの得点が有意に上昇していた。しかし、大学生活の満足度との間には関係が認められていない。新人看護婦では、ロール・モデルとしてのプリセプターのいる場合にスキル得点が高くなることが示されている。布佐・三浦・野崎・千田（1999）と野崎・布佐・三浦・千田（2002）では、87名の看護学部学生について、その夏休み中の対人的経験を「積極的経験あり」「積極的・消極的経験あり」「消極的経験のみ」の3群に分けて検討したところ、後者の2群間で有意の差があり、「積極・消極」双方の経験をした者の得点が高くなっていた。

廣実（2003）は、上でみた因子分析の結果をもとに、大学生437名を親しい友人がいる群とそうでない群とに分けて、スキルとの関係を比較している。分散分析の結果では、「関係修復スキル」において親しい友人がいない群の得点が有意に低いことが示された。「関係開始」「自己解決」のスキルでは、こうした差はみられなかった。尾崎・久東（2003）は208名の女子大学生について、その友人とのコミュニケーション・スタイルとの関係を問題にしている。「本音を伝える手段」としてコミュニケーションを考える面で、対面選択を多く選ぶ群のほうがそうでない群（対面選択少群）よりもこの尺度の平均値が高い傾向（ $p < 0.1$ ）があった。

2）前に見たように、和田（2003）の42名の大学生・大学院生についての報告では、このスキル尺度を

用いた自己評定と他者評定（5人の同性の友人による）とが問題にされている。この2種類の評定間の相関は全体として有意ではない（.10）が、それは自己評定が他者評定よりも高い群（自惚れ型）と他者評定のほうが高い群（謙遜型）とが混在しているためだという。2つの型別に求めた相関係数は、「自惚れ型」で.75・「謙遜型」で.60という高い値を示した。このスキルの自己評定の高いものは他者評定も高くなっていて、この尺度の妥当性を示している。

3）向社会的行動との関係については、向社会的行動尺度・大学生版（菊池，1988b）との関係が報告されている。女子短大生54名についての結果は.37という相関であった（菊池，1988・1998）。鈴木（1992）による女子大生115名についてのパス解析の結果では、これと同じ向社会的行動尺度の得点とスキル得点との間には関係が認められないとされている。しかし、スキル尺度（2項目追加）を因子分析して得られた因子の中で、「他者とのコミュニケーション」の因子とは関連（ $\beta = .30$ ）が認められた。島田・高木（1994）での重回帰分析とパス解析の結果からも、「路上で書類を散乱させた」「道を尋ねる」という援助要請場面への回答との間には関連がみられない。ここでとり上げられているのがこうした場面での認知であって、スキル尺度が問題にしている行動の遂行ではないためであろうとされている。松浦（2003）は、男女の大学生189名に12種の援助行動についての援助意思を問い、それとこの尺度の得点との関係を分析した。重回帰分析の結果は、スキル得点が援助行動の規定因として有効である傾向（ $p < 0.1$ ）があった。

廣実（2003）は、「親しい友人がいる」と回答した大学生387名について、同調行動との関係を分析した。パス解析の結果では、同調的で深化回避的な「表面的交友群」と同調的でなく相互理解も求めない「防衛的交友群」とでは同調行動との関係に違いがあり、前者ではプラス（.60）・後者ではマイナス（-.33）の β 係数であった。

4）コミュニケーション行動との関係では、Ito（1994）が実験的に構成された2人会話場面でのリズムがこの尺度の得点と関連していることを指摘している。6人の女子大学生がそれぞれペアを組み（15組）、5分間の会話をした。スキル尺度の得点と会話のリズムの非同期の指標とは-.84・リズムの柔軟性の指標とは.67の相関がみられた。田中・松井（2003）は、12集団・

114名の大学生について、集団の仲間から「会話の上手な人」とされた者（12名）とそうでない者（72名）とのスキル得点を比較し、前者の平均値が高いと報告している。熊谷・菊池（1997）は男女の大学生60名の資料について、自分の発話について「はい」「うん」などのひとりあいづちを使う男性はそうでない者よりも、この尺度の得点が低いという結果を得ている。

河野（1996）は教室での非言語コミュニケーションを問題にし、小学生が算数の問題を解いている場面のビデオを見せて解答の正誤を推測させた場合、男子大学生45名についての正答数との相関が.35であったことを報告している。

出口（2003）は、男女の大学生・短大生222名について、「授業に関連した私語」と「無関係な私語」とを規範意識とスキル得点との関係から分析した。分散分析の結果は、「無関係な私語」について交互作用が認められ、規範意識の低い者やスキル得点の高い者ほど私語が多いことが明らかであった。

化粧行動については、大坊（1991）の女子短大生347名のデータでは、化粧品保有数と.29・化粧の濃さと.21・化粧の個性度と.36の相関関係があるという。

5) コンピュータを媒介としたコミュニケーション(CMC)についての研究がいくつかなされている。篠原・三浦（1999）では、上でみたWWW掲示板への参加者についての因子分析から出てきた「コミュニケーションスキル」の得点で、初期参加者（最初だけ書き込みをする者）は高参加者（常に書き込む者）よりも低い傾向（ $p=.06$ ）であることを示した。五十嵐（2001・2002）は、社会的スキルが対面的なコミュニケーション(FTF)とCMCとのネットワークを介して個独感に与える影響を検討するのに、この尺度を使っている。対象は、男女の大学生265名とインターネット上での調査に参加した人びと177名である。この尺度で測定された社会的スキルが、対面的なネットワークの形成に影響を与えて孤独感が低減されること、社会的スキルの低さが直接に孤独感につながっていることが、重回帰分析の結果から明らかであった。しかし、この種のスキルはCMCでのネットワークの形成を左右してはいるものの、それが孤独感の低減につながるとはいえなかった。

小林・坂元ほか（2000）は、男女の専門学校生102名について、インターネット上で出会った人に知り合い・友人（異性・同性）・親友（異性・同性）・恋人

がどれくらいいるかをたずね、それとスキル得点との関係を分析したが、有意の関連は見出せなかった。小林・坂元ほか（2001）では、この点を3か月間隔で2回の調査を行うことで、オンライン・オフラインの双方から検討している。その結果、同性の親友についてオンラインの関係からスキルへの影響が認められ、オンラインで同性の親友が多いほど、3か月後の社会的スキルが高いという。これとは逆の関係が異性の友人の場合に認められ、スキル得点の高い者ほど3か月後のオンラインでの異性の友人が多いといえる。

笠木・大坊（2003）では、男女各20名について、実験的に設定された2・3人の会話場面での発言文字数・平均文字数・発言回数などを、CMC条件と対面条件とで検討している。スキル得点との関係は、対面条件での発言文字数で.35、平均文字数で.39であり、CMC条件ではこうしたことはみられなかった。

インターネットの使用そのものと社会的スキルとの関係が、鈴木・坂元ほか（2001）によって検討されている。電子メールの読み書き・HPの作成や閲覧・チャットでの会話・ネットワークゲームなどのインターネット使用量を専門学校生174名について調べ、それとスキル得点との関係をパス解析で分析した。その結果、電子メールやネットワークゲームの使用が多いほどスキル得点が高まること、スキル得点の高いほどHPの閲覧が多くなることが示された。上でみた因子別では、ネットワークの使用の多いほど「問題解決スキル」の得点が高くなるという結果である。

6) 性行動との関係が和田（2000）によって検討されている。男女の大学生281名を「性交経験者」「潜在的未経験者（婚前性交を肯定）」「確固たる未経験者（それを否定）」の3群に分けて検討したところ、男女とも経験者のスキル得点が潜在的未経験者よりも高かった。また、同じ和田（2002）の男女の大学生240名についての2回の調査（3-8か月間隔）の分析では、キス経験の「未経験-未経験」（64名）「未経験-経験」（19名）「経験-経験」（55名）の3群間で、「経験-経験」群のスキル得点が他の2群より高かった。またこの場合、2回目の平均値がいずれの群でも高くなっていったという。

ジェンダー・タイプとの関係を男女の高校生238名について分析したのが、木村・田中・小杉（2003）である。このタイプを4つに分け、そのスキル得点を分散分析にかけた結果では、両性具有群は女性優位群・

未分化群よりもこの得点が高かった。また、男性優位群は未分化群よりもこの得点が高くなっていた。

7) いくつかのトレーニングの効果分析にこの尺度を用いた研究がある。相川(1998)は、孤独感の高い被験者9名に実施した10回の社会的スキル訓練の効果を、同数の統制群の結果と比較して分析している。その結果、対人不安・自己効力感・自尊心などの尺度では変化が見られなかったが、この尺度の得点は上昇する傾向($p=.07$)であった。しかしこの効果は、6か月後のフォロー・アップでは認められていない。

大坊・栗林・中野(2000)は、1学期間13回の社会的スキル実習プログラム(自己紹介・アイコンタクト・自己主張など)に参加した82名の男女大学生のスキル得点が有意に上昇したと報告している。津村(2002・2003)は、男女の大学生について4か月間に12回のグループ・トレーニング(61名)と8日間の同種の集中プログラム(43名)とを実施し、その効果を比較検討している。どちらのプログラムについても、スキル得点の上昇が有意に認められた。また、上で見た因子分析の因子ごとにこの変化を男女別・プログラム別に検討したところ、「感情処理のスキル」以外の多くのスキルで、有意の得点の上昇がみられた。吉山(2003)は133名の短大生を対象に、半年にわたる集団体験を中心とした授業への参加による変化を、76名の対照群と比較している。結果は、この種の体験がスキル得点を上昇させたり・この点での自信を持たせたりすることが明らかであった。久木山(2003)では、大学生302名にこの尺度を実施すると同時に、スキル改善のきっかけとその改善方略をも自由記述させている。3か月後にもう一度この尺度を実施し、得点の上昇ときっかけや方略との関係を分析した結果は、「スキル不足の原因に着目した」認知的な改善方略が得点の上昇と関連していることを示した。

看護婦養成校生・看護短大生148名についての4回のロールプレイ演習では、この種の演習が「有効だ」とする回答が多かったものの、社会的スキルの面での効果はみられていない(谷口・吉野・澤田, 2002)。プログラムの期間やその内容によって、この尺度への効果は別のものになることが明らかである。

行動的指標との関係では、この尺度の得点と年齢や対人的体験が関連していることが指摘されてきた。自己評定と他者評定との間にも高い相関が認められた。

向社会的行動やインターネット利用を含めてのコミュニケーション行動、性行動などについてもこの得点が関係を持つことが示されている。また、各種のトレーニング効果の測定にも有効であるとされている。いずれもこの尺度の妥当性を示すとともに、その適用範囲の広さをも示している。

■評価と今後の問題

KiSS-18は、十分な信頼性や妥当性をもつ尺度として認められてきたといえる。その妥当性は他の尺度との関係だけでなく、コミュニケーション行動や性行動、インターネットの使用など具体的行動との関係のほか、他者評定でも認められている。この尺度の利用は、社会・臨床・産業・教育などの心理学の領域のほかに、学校教育や看護教育の現場などにも広がっている。この分野の専門家によって一定の評価が与えられてきた(小林, 1996・渡辺, 1996)し、大学などの授業での利用も勧められ(宮沢・二宮・大野木, 1991; 卜部, 1997)、定評のある尺度集など(堀・山本・松井, 1994・堀, 2003・菊池, 2004)にも載せられている。また、この尺度の韓国語版(佐藤, 1996)や中国語版(Xue, 1999)も作成されている。

こうしてKiSS-18は、多くの研究者たちによってとり上げられることの多かった、たいへんに幸運な尺度であったといえる。社会的スキルを全般的に測定するというこの尺度の目的は、おおむね達せられたということができよう。そして今後とも、多様な利用が期待される。しかし見方を換えると、この研究の領域では次への動きが必要になっているのかもしれない。千葉・相川(2000)が看護でのスキル尺度を作成したように、個別の領域での尺度構成が必要な時期でもあろう。こうした試みが少ないのは気になることである。

KiSS-18そのものについていえば、この尺度の標準化がまだなされていないことが、この尺度の利用にとってネックになっていることはある。ここでみてきたように、少なくとも大学生のサンプルについては、十分なデータが集められてきていることは確かである。こうしたデータに基づいて、この尺度の標準化を試みるのが次の仕事である。

なお、このノートでとり上げた論文や学会発表などは、筆者の気づいたものに限られている。これ以外のこの種の資料などをお持ちの方は、kikuchi@iwate-pu.ac.jp までお教えいただけるとありがたい。

* 15年前にこの尺度の開発を手伝ってくれた佐藤公文・佐藤由弘（当時、福島大学大学院教育学研究科）両君のことを思い出して、改めて感謝したい。今回、文献の収集を助けてくださった福島 治・三浦まゆみの両氏にもお礼申したい。

（文献）

- 相川 充 1998 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究 14巻2号 95-105
- 千葉京子・相川 充 2000 看護における社会的スキル尺度の構成 看護研究 33巻2号 139-148
- 大坊郁夫 1991 外見印象管理と社会的スキル グループダイナミクス学会39回大会発表論文集 115-116
- 大坊郁夫・栗林 克・中野 星 2000 社会的スキル実習の試み 北海道心理学会47回大会発表（北海道心理学研究 23号 22）
- 布佐真理子ほか 1998 看護学士課程入学生の社会的スキルの認識（未発表）
- 布佐真理子・三浦まゆみ・野崎智恵子・千田睦美 1999 看護大学生の社会的スキル—1年間の生活体験と自己効力感との関連に焦点を当てて— 日本看護学教育学会9回学術集会講演集 118
- 布佐真理子・三浦まゆみ・千田睦美・加賀谷聡子・村田千代 2002 新人看護婦における看護の社会的スキル尺度の構造 岩手県立大学看護学部紀要 4巻 25-35
- Goldstein, A. P. et al., 1980 *Skill Streaming the Adolescent : a Structured Learning Approach to Teaching Prosocial Skills*. Research Press.
- 橋本 剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究 48巻1号 94-102
- 畑中美穂・松井 豊 2003 会話行動の意思決定過程—会話の上手さの観点による探索的研究— 対人社会心理学研究 3号 29-37
- 林 理・菊池章夫 1993 しきり人にはこれが要る 社会心理学会34回大会発表論文集 188-189
- 林 理・菊池章夫 1994 これであなたもしきり人 社会心理学会35回大会発表論文集 282-283
- 林 理・菊池章夫ほか 1994 しきり行動尺度作成の試み 人文論叢（東京工業大） 78-84
- 廣實優子 2003 親しい友人がいる青年といない青年との差異（1） 教育心理学会45回総会発表論文集 448
- 廣實優子 2003 自己受容性・社会的スキルが同調行動に与える影響 日本心理学会67回大会発表論文集 163
- 堀 洋道・山本真理子・松井 豊 1994 「心理尺度ファイル」 垣内出版
- 堀 洋道（監修）2001 「心理測定尺度II」 サイエンス社
- 五十嵐 祐 2001 CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学会42回大会発表論文集 544-545
- 五十嵐 祐 2002 CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性 社会心理学研究 17巻2号 97-108
- 飯田順子・石隈利紀 2000 中学生の発達を促進するスキルに関する研究 教育心理学会42回総会発表論文集 621
- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度（中学生版）の開発— 教育心理学研究 50巻2号 225-236
- 稲垣宏樹・河合千恵子・石原 治・権藤恭之・下仲順子・中里克治・長田由紀子・蘭牟田洋美・高山 緑 2000 中高年期の対人関係スキルに関する研究 日本心理学会64回大会発表論文集
- Ito, T. 1994 An analysis of individual "rhythm" in face-to-face interaction. *Japanese Psychological Research*, 36, 74-82.
- 加賀谷聡子・布佐真理子・三浦まゆみ・千田睦美・村田千代 2002 新人看護婦の社会的スキル 岩手県立大学看護学部紀要 4巻 77-82
- 笠木理史・大坊郁夫 2003 CMCと対面場面におけるコミュニケーション特徴に関する研究 対人社会心理学研究 3号
- 粕谷貴志・川村茂雄 1999 学校生活満足尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点 カウンセリング研究 35巻 116-123
- 川村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度（高校生用）の作成 岩手大学教育学部研究年報 59集 111-120
- 菊池章夫 1988a Social Skill尺度の作成 東北心理学会42回大会発表（東北心理学研究 38号 67-68）

- 菊池章夫 1988b 「思いやりを科学する」 川島書店
- 菊池章夫 1989 社会的スキルの問題 教育心理学会
31回大会小講演
- 菊池章夫 1993 「社会的出会いの心理学」 川島書店
- 菊池章夫1994 KiSS-18のこと 菊池章夫・堀毛一也
(編著) 「社会的スキルの心理学」 川島書店
177-183
- 菊池章夫 1998 「また／思いやりを科学する」 川島
書店
- 菊池章夫 1999 KiSS-18の12年 性格心理学会 8 回
大会発表論文集 26-27
- 菊池章夫 2003 社会的スキルを考える 教育と医学
10月号 4-10
- 菊池章夫 2004 (印刷中) KiSS-18 氏原 寛ほか
(編)「心理査定実践ハンドブック」 創元社
- 菊池章夫・堀毛一也(編著)1994「社会的スキルの心
理学」川島書店
- 菊池 聡 1999 「おたく」ステレオタイプと社会的ス
キルに関する研究 教育心理学会41回総会発表論文
集 177
- 木村幸恵・田中健吾・小杉正太郎 2003 高校生のジェ
ンダー・タイプとソーシャルスキルとの関連 社会
心理学会43回大会発表論文集 468-469
- 久木山健一 2003 社会的スキル改善における「きっ
かけ」・方略・効果の関連 教育心理学会45回総会
発表論文集 486
- 熊谷理央・菊池章夫 1997 ひとりあいづちの性格的
要因 性格心理学研究 6巻1号 67-68
- 小林久美子・坂元 章・鈴木佳苗・安藤玲子ほか
2000 インターネット上における関係形成 日本心
理学会64回大会発表論文集 216
- 小林久美子・坂元 章ほか 2001 オンラインの関係
数がオフラインの対人関係に及ぼす影響 性格心理
学会10回大会発表論文集 138-139
- 小林正幸 1996 社会的スキルの測定 相川 充・津
村俊充(編)「社会的スキルと対人関係」 誠信書
房 23-46
- 河野義章 1996 「文章題解答中の非言語行動の表出と
読みとりに関する研究」 風間書房
- 松島るみ 1999 シャイネスが自己開示に及ぼす影響—
社会的スキルを媒介として— 教育心理学会41回総
会発表論文集 357
- 松浦 均 2003 援助行動経験と援助効果が今後の援
助場面に及ぼす影響 教育心理学会45回総会発表論
文集 256
- 宮沢秀次・二宮克美・大野木裕明 1991 「自分で
きる心理学」 ナカニシヤ出版
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦 2002 大学生におけ
る自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の
試み 性格心理学研究 11巻1号 12-23
- 望月晃二 1995 自己効力感による慢性長期入院の精神
分裂症者の特徴について 東北心理学会49回大会発
表(東北心理学研究 45号 16)
- 中村 晃 2000 自己愛と社会的スキル、および孤独
感との関係 教育心理学会42回総会発表論文集
558
- 中村 真・益谷 真 1991 感情的コミュニケーション
能力と社会的スキル 社会心理学会32回大会発表論
文集 318-321
- 野崎智恵子・千田睦美・布佐真理子・三浦まゆみ
1999 看護大学生の社会的スキル 30回日本看護学
会論文集 74-76
- 野崎智恵子・布佐真理子・三浦まゆみ・千田睦美
2002 1年間の経過からみた看護大学生の社会的ス
キルと自己効力感、生活体験の関連 東北大学医療
技術短期大学部紀要 11巻2号 237-243
- 尾崎かおる・久東光代 2003 パーソナルメディアの
多様化と青年期の交友関係意識(6) 教育心理学
会45回総会発表論文集 271
- 佐藤直子 1997 日・韓大学生の自己表現法の比較 東
北大学大学院文学研究科(日本語教育専攻)修士論文
(未発表)
- 島田 泉・高木 修 1994 援助要請を抑制する要因の研
究 I—状況認知要因と個人特性の効果について—
社会心理学研究 10巻1号 35-43
- 篠原一光・三浦麻子 1999 WWW掲示板を用いた電子
コミュニティ形成過程に関する研究 社会心理学研
究 14巻3号 144-154
- 菅原健介 1998 シャイネスにおける対人不安傾向と対
人消極傾向 性格心理学研究 7巻1号 22-32
- 住田修平・田中健吾・小杉正太郎 2003 大学生のソー
シャルスキルがソーシャルサポート、コーピング方
略に及ぼす影響 社会心理学会43回大会発表論文集
470-471
- 鈴木佳苗ほか 2001 インターネット使用がソーシャ
ルスキルに及ぼす効果—アプリケーション別の検討—

- 性格心理学会10回大会発表論文集 46-47
- 鈴木隆子 1992 向社会的行動に影響する諸要因－共感性・社会的スキル・外向性－ 実験社会心理学研究 32巻 71-84
- Takai, J. and Ota, H. 1993 Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
- 田中健吾・小杉正太郎 2003 ソーシャルスキルと職場ストレス・ストレス反応との関連（I） 社会心理学会43回大会発表論文集 466-467
- 谷田林士・山岸俊男 2004 共感が社会的交換場面における行動予測の正確さに及ぼす効果 心理学的研究 74巻6号 512-520
- 谷口ひろ子・吉野淳一・澤田いずみ 2002 対人関係技術に関するロールプレイ演習とその評価 精神科看護 29巻5号 46-51
- 津村俊充 2002 ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果－社会的スキル尺度KiSS-18を手がかりにして－ アカデミア（人文・社会科学編） 74号 291-320
- 津村俊充 2003 ラボラトリ・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果 社会心理学会43回発表論文集 456-457
- ト部敬康 1997 「鍋奉行」とリーダーシップ 藤原武弘（編）「社会心理学」培風館 119-120
- 和田 実 1992 ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要第一部門（教育学） 43集 123-136
- 和田 実 2000 大学生の性交経験と個人的背景要因および心理的特性との関連－性交経験者、潜在的未経験者、確固たる未経験者の比較－ 思春期学 18巻3号 273-281
- 和田 実 2001 大学生の性に対する態度と性行動の関連に関する縦断的研究 思春期学 19巻2号 210-218
- 和田 実 2003 社会的スキルとノンバーバルスキルの自他認知と心理的適応との関係 カウンセリング研究 36巻 246-256
- 渡部玲二郎 1999 対人関係能力と対人欲求との関係 心理学研究 70巻2号 154-159
- Xue Changui, 1999 VEPの感情心理学への適用 岩手大学大学院教育学研究科修士論文（未発表）
- 山近良裕・大坊郁夫 2001 青年の「むなしさ」と社会的スキルとの関係 社会心理学会42回大会発表論文集 306-307
- 山口拓彦 2003 大学生の私語と規範意識および社会的スキル・視点取得との関連 教育心理学会45回総会発表論文集 380
- 吉山尚裕 2003 グループ体験学習が社会的スキルと孤独感に及ぼす効果 教育心理学会45回総会発表論文集 262
- 渡辺弥生 1996 「ソーシャル・スキル・トレーニング」 日本文化科学社